

# 傾城反魂香

近松門左衛門作

次第 素きを後と花の雪。白きを後と花の雪。野山や春を盡くらん。地 聞きに北野の時鳥初音を啼きし其の昔。清涼殿に立てられし。跳馬の障子の繪。夜毎に出でて萩の戸の。萩をくひしも金岡が。筆のすさみの。跡絶えず傳はる家や畫工の譽。狩野四郎二郎元信。丹青の器量古今に長じ心ばへよき男ぶり。親の繪筆の彩色に、フシ生れ。つきなる美男なり。地 頃は文龜の彌生の空天満天神の告有りて。越前の國氣比の浦へと旅羽織。我は笠きて大小の。柄にも袋させる筒。丁稚がこしの白山もフシ去年の縁にかへる山。フシ山のいたゞき。青々と。雲にうつらふ月代の。湯尾峠の孫杓子。盛りこほしたる花重。かさねくし旅籠屋が。情もあつき爛鍋の。フシ敦賀の。濱にぞ着き給ふ。地 四郎

二郎一僕を招き。ヤイ雅樂之介。外の弟子にも隠し此の所に下りしこと餘の儀にあらず。近江の國の大名六角左京大夫頼賢殿と申すは。佐々木源氏の旗頭高島の館とて。系圖所領並びなき大將なるが將軍家の御意を受け。本朝名木の松の繪本を集めらる。然るに奥州武隈の松と云ふ名木は。往古能因法師さへ跡なくなりしと詠みたれば。地名のみ残つて知る人なし。我是を書きあらはし。譽を得させ給はれと。天満天神を祈りし所に。調 武隈の松を見んと思はゞ。越前の國氣比の濱邊に行くべしとあらたに靈夢を蒙れども。地 それは陸奥爰は越路。何を知識に尋ぬべき。あはれ里人の來れかしフシ物問はんとぞ呼ばはる。ワキ 所の者に御用とは都人にて有りけに候。御尋ね有りたき

とは何事にてばし御座候。シテ御覽の如く都の者。天神の教へによつて松を尋ぬる仔細あり。この所にこそ名高き松の候ふらめ教へて給はり候へとよ。ワキ 是は思ひも寄らぬ事を承るものかな。此の北國にてお尋ねあらうならば。越前布越前綿。若は實盛の生國なれば。お供の奴の髭にぬる油墨などのお尋ねもあるべきに。名高い松とは流石優しき都人。先づ當國の名木は。西行が汐越の松。淺生の松若が物見の松。金が崎には義貞の腰掛松。山のを山松庭のを庭松。門には門松酒には濱松。肥たは肥松ねぢたは詮松わり松たい松ぬつほり松。我等が息子に岩松長松と申す嬰兒もあり。庄屋の名は松兵衛。若い時には相撲取。赤松ぶち割つた様に御座有りしが。今老松になられて力ももとより下り松。腰も屈んでるざり松と所の人は呼び候。ヤア。誠に天神の御告と有るに思ひ當つた。當所敦賀の町に名高き松の御座候。是ぞ京にも類なしと心を懸け

ぬ人もなき。色よき松の候が。もし左様の行き當り。是はさて松かと思つてはまつ松にては御座なく候か。實にや往來も慕ふとは疑もなく我等が尋ぬる名木よ。急いで見せて給はれかし。ワ、いつも夕暮ごとに此の所へ現れ出で給ひ候。ヤア、くはやあれへ御出下候。我等は御暇賜り候べし。御逗留の間御用の事は承り候べし。頼み申し候はん。ワ、心得申して候。高き名の。松の門立たちなれてフシ人待ち顔の暮ならん。町は敦賀の。かけ作り。情夫こそ汐の満干なれ誰をかも知る人にせん。フシ此の麻の松と成りしも。親の爲。賣られ買はれて北國の土けの、賤の里なれどよねの育ちは上田の。水損なしの太夫職。名を遠山と呼ばれしも。人に登れの戀の坂。おろし歩みの道中は。花の立木の其の儘に。フシぬめり。出でたる。如くなり。地雅樂之介これ申しみごとな者がそれをこへ。それくといへば四郎二郎ヤア何と。松が見えたか現れたか。寫しとめんとふつと立ち女郎にはたと

行き當り。是はさて松かと思つてはまつた。地本の松を尋ねて見ん。丁稚來いと行違ふ袖を控へて是申し。此の遠國の我々と。京の麻の松様達と比べさんすが不覺の至り。地併し不粹なお方には。松と見られて嬉しうなし。杉と云はれて腹立たず。桑の木とも榎とも。こなさあに似合つた阿呆の木とも見さんせと。無駄言なしの云ひ捨はフシ田舎妓とて笑はれず。地ヲ、御機嫌損ねし御才。けに、松とは太夫様。我等は悪う心得て不調法な御挨拶。眞平くお詫事。是を御縁にお知人に成りました。し下拙事は狩野の四郎二郎元信と申す僅かの繪師。さる御方より武隈の松の圖を仕れとの仰せ。則ち天満天神の夢想に任せ。此の所にて名有る松と尋ねしを。太夫様との取りちがへははからうも有らう事。御料簡ついでにお附合も數願のかなふ便りもあらば。御世話頼み奉ると。フシ思ひ。入つてぞ語らる。地扱は狩野の四郎二郎つて腰つきも。千年の筆寫せしは作意なり

けり。先づ歌人の見立には。一本松を二本

とも三木とつらねし言の葉の。それは老木

の松が枝なれど、ホオクリ寫す、若木の。やつ

このくくく。此の膝のふし、フシ松の節。

前へ地摺の下枝にぬつと出せし片足は。慮

外千萬千貫枝。筆捨枝や久方の天津。少女

のかたくま枝や、腰掛。枝の三がい松。月

にさはらぬ。枝々の。さゞれ小枝の松蔭を。

サア沖こぐ船の帆の、フシほの見えて。地さす

腕には壽福の枝收むる手には不老の枝。垂

れて雪見の控への枝。是々これく。すつと

のびたる流しの枝。松は非情の。フシ物だに

も。傳へし心の。色はなほ、さながら青々

條々として。松の生木のいきくと、若や

ぎ、立てる其の風情。狩野は一點違ひなく。

書きつらねたる筆勢は。何れを寫し繪何れ

を立枝。フシ紛ひつべうぞ見えにける。地元

信家の幸甚たり。早速歸り本懐とけ。此の

報恩には御身の上父御の事も請取り申す。

萬のお禮は本國よりと立歸るをこれ申し。

神のお告に任せしからは思にはかけず末

かけて。情を思召すならば、地必ず外に内儀

様持つてばし下んすな。奴殿頼みます何が

さてく。天神様より太夫様、追付けお

二人連理の松。中に立ちたる此の松は島臺

持つての取結び。千年萬年萬々年。とち付

きひつ付き松脂の離れぬ。中とぞ、三重、壽き

し。フシされば江州。地高島の館左京の太夫

頼賢卿。參觀の上洛あり。執權不破の入道

道犬。同じく嫡子不破の伴左衛門宗末。國

を頂がる留守居なり。御家の繪師長谷部の

雲谷あわたしく。入道親子が前に手を束

ね。近頃過言に候へども。某事は雪舟の

嫡傳として代々の御扶持人。此の高島のお

館にて。繪筆を取つて誰人か拙者が上に着

き申さん。然るに此の度狩野とやらん申す

二才。武隈の松を書きしとて過分の恩賞を

下され。古參を踏付け御前にはびこり剩へ

今日は奥方へ召され姫君様より。お料理を

下さるゝと承る。地殿様の御留守誰が許し

ての推參。御家老の仰せ一國に違背申す者

はなし。きつとお仕置然るべしとぞ支へけ

る。地道犬領きつと寄れ雲谷。總じて此の

四郎二郎めは身が相役名古屋山三が取持に

て召出された。山三は元來お小姓立前髪の

酒林で殿を酔はせし男傾城。嘴の黄な小雀

が家老並に列なり。威を振ふ其の山三めを

甲に着て。のさばりまはる四郎二郎我々親

子が睨めども。事とも思はぬ奇怪さ其の方

とても同然たり。又乙の姫君銀杏の前は。

御愛子なれども妾腹ゆる御臺所を憚り給ひ。

田上郡七百町の御朱印を付けられ。京都有

徳の町人か由緒ある御家中へも。下されん

との御内意ゆる某嫁に申し請け。此の伴左

衛門に縁邊し七百町を主附かんと當てはめ

て置いたもの姫君狩野めに心を通はし。地今

日密々祝言ありと。奥目付より聞きたれど

も御意とあればせんかたなし。御在京の其

の間は山三めも留守なれば。彼奴が方人す

る者なし少しにても過りを。随分見出せ聞

出せ慮外をせば打殺せ。御留守の間國中は  
某が裁断なり。此の不破といふ鰐が魅入れ  
て餘り程はあらせまい。試して見たい新刃  
はないか。一の胴か二の胴か。望んで置け  
と云ひければ雲谷甚た笑壺に入り。政道正  
しき御家老様。お屋形の心柱と。フシ追従

たら。見苦し。地かくとは知らず四郎  
二郎櫻の間に伺候し。御姫君銀杏の前様よ  
り御掛物を仰付けられ持参仕り候御取次頼  
み奉ると。云へども入道伴左衛門しろうりと  
見たるばかりにて。返答もせず睨付くるヤア  
しれ者よ。側には雲谷いかさま我に手を取  
らする巧あり。立ち歸るも不覺なり幸ひ幸  
ひ。奥へ通路の鈴の綱。ふりはへ引けば鈴  
の音オクリおうと。答ふる。女の聲。宮内卿  
とて中老の局立出でヤア狩野殿か。地姫君様  
の御待ちかね。お直の御用も有るとのお事  
サア。此方へとありければ。畏つて四郎  
二郎入らんとすれば。伴左衛門聲をかけ待  
て。お家の掟を知らずんばなぜ

物頭には伺はぬ。知つて背くか不屈千萬。  
上より御許しなき時に及物を帶し。奥方へ  
参ること。禁制との御條目。あれ大小腕  
いで引きずり出せ當番々々と呼ばはれば。  
宮内卿いや是は私ならず。姫君様より殿様  
へ御伺ひ。則ち京より名古屋山三殿の指圖  
にて。奥へ召さる。四郎二郎なんのお咎め  
ござらうと。云へども更に聞入れず。御お  
留守を預る家老の耳へ。承らぬ御意なれば

殿の御意でも叶はぬこと。地それ伴左衛門  
擁いで取れまつかせと立上る。四郎二郎も  
身構へしてすがらば切らんず眼ざし。左右  
なくも寄付かずサア。渡せ。と。フシ詞で  
嚇すばかりなり。地時に奥よりお腰元つか  
く。と出で。御これ。いづれもお姫様よ  
り御意が有る。四郎二郎殿には直に御用の  
事あれども。丸腰でなければ奥へ通さね御  
法度と有れば。是非に叶はず姫君様此の所  
へ御出でとの仰せなり。四郎二郎殿は御用  
人。其の外の男の分雲谷は云ふに及ばず。

御家老殿を始め御前へは叶はぬ。皆お廣間  
へ立ちませい。地。との權柄さ。道大親  
子無念ながら突と立つて。サア雲谷姫君の  
御前へは。男たる者罷り出でず男でもない  
奴原に。侍の辭儀無用の沙汰と。四郎二郎  
に刀の館。打ち當て。袴の裾。踏みた。

くつて睨み付けオクリお次の間に。フシ出で  
にける。地御留守と云ひ女中の邊なほ穩便  
にこととせす。御好の掛物梅に泡雪雉山  
鳥。仕つて候と紐を解いて懸ければ。こ  
の由披露致さんにサアまづゆるりとお茶進  
じやと。局は奥にあい。と愛想らしきこ  
ゑ。の。男の側へよる事は常に梨地の煙  
草盆。落雁かすてら羊羹より。菓子盆運ぶ  
腰元の。鱧頭肌ぞなつかしき。地物に臆せ  
ぬ男なれども女中の色に目うつりして。氣  
を取られたる折ふし十八九なる脇詰の。後  
結びも格別に。銚子盃前に置きしとやかに  
手をついて。私はお姫様のお髪上げ藤袴と  
申す者。しみ。お咄致しませいとの御事

ぞや。御存じの通りお妾腹のお姫様。御臺みだい申し。慾心に紛るゝこと世間の嘲り。よし御機嫌に違ひ改易仰せ付けらるゝとて。

第縁次第と田上郡七百町たがみちの地 御朱印握つて地御恨み候まじ御請とは成りがたし。よき様に御執りなし頼み入るとぞ言ひ切つた

色とお乳の人お局。口のすい程勤めてもどる。何に間ハアにべもなう埒あいた。しかし如

うでもお請けないとの事。おいとしや姫君は何に間としても上つ方へ左様な慮外申されま

餘りの事に戀ひ焦れ。私をお寢間へ召しやありと申しなば。お胸の晴るる事もありさ

と名を付けて。心ゆかしに抱いて寢よそち念の爲。其の女房は何者と期度をつかるる

れともがき事がおいとしさに。とんと下紐とつと前から藤袴と契約ありと申さば。

打解けて。ねる程抱く程しめる程スエテ二人いかな主でも大名でも此の道ばかりはせん

の心せくばかり。フシどちらぞ男に成りたいが先。此の談合はどう御座んしよ。ヲ、ウ

と云うても泣いても叶はゞこそ。幸ひ望む所。サア盃仕らう。いやくい

名の手業にも有るべき道具の足らぬのは。ややく。我とても假にはいや。佛神掛けて

ひよんな物とおむつかる。みづからにの女夫どや。誓文々々繪筆を取らぬ法も

いなせの返事聞切り参れとお使。私も一あれ。かうぢやくと抱き付き近頃嬉しい

分立つ様にフシお返事なされと述べにける。忝し。是祝言の盃と一つ受けて元信に。妻  
地元信額を疊につけ冥加にあまる仕合ながの盃頂く作法儀式は堅うと四海波。腰元中  
ら。度々お返事申す如く諸傍輩の猜みとが諱ひつれ奥よりお局島臺に。七百町の御  
形を調伏とは此の方の言譯よりまづ御咎め

の證據。承らんとぞ答へける。雲谷下座よ  
りこりやく證據は某よ。總じて繪師の秘  
密にて繪を描いて調伏すること。人は知ら  
じと思へども此の雲谷が見付けた。此の掛  
繪は和主が筆。梅に山鳥雲に雉。抑當家は  
高島の御屋形と號す。山偏に鳥と書いては嶋  
とよむ文字なり。梅の梢に山鳥の高々と留  
りしは。これ高島にあらずや。雉にほろろ  
の聲有つて雪は降るとの心あり。讀みくだ  
せば高島亡ぶる調伏。狩野とはかりの野と  
書けり。姫君と心を合せ屋形を亡し。一國  
を己れが狩場の野原にせんずる表相。地重  
罪のがれず福かゝれと。取付く所をひつば  
づし胸板はたと蹴倒す間に。飛びかゝる伴  
左衛門が眞甲刀の柄にてはつしと打ち。す  
ぐに抜かんとする所を隠し置いたる捕手の  
者。十手八方鐵鞭をぶち立てぶち立て捻伏  
せて。高手小手に縛め黒書院の床柱に。思  
ふさまに縛り付け姫君の御朱印を。奪取れ  
と群がるを。女中手々に枕槍。長刀にて引

包み圍ひ防げば餘さじと、フシ奥をさして追  
つめける。腰掛に控へし雅樂之介かくと聞  
くよりたまられず。かけ廻つても奥力の勝  
手は知らず中口の。不開の門碎けてのけと  
扉を叩き。獨狩野の四郎二郎元信が弟子。  
雅樂之介之信と云ふ草履取。主といひ師匠  
なり死ぬる道なら共に死なん。高が繪書の  
丁稚づれ怖い事も有るまい。相手の首取る  
分のこと。地開けよ明けよと貫の木も。折  
るゝばかりに踏みたゞき。フシ鳥居立にぞ降  
つたる。地元信内より雅樂之介か満足した。

身に誤なき上に慮外をして姫君の。御身の  
あやまち氣遣はし、フシ歸れ〜と呼ばはれ  
ば。ア、慮外と云ふも事による。明けす  
ば踏んで踏破ると。地わめきちらせば雲谷不  
破。雅樂之介を打殺せと引返して門の貫の  
木。はづす所をつけ入りに。雲谷が小額す  
つばと切下げたり。あいつたしと躍り上り  
二人抜き連れ打ちかくる。彼方へ追詰め此  
方に支へ城下をさして。三重へ切り出づる。

地四郎二郎地階踏んで。エ、佞人どもむざ  
〜とは死ぬまい。親より傳へし一心の繪  
筆は爰ぞと觀念し。右の肩に齒を立て、ふ  
つ、〜と喰破り。口に我が身の血を含み。  
襖戸に吹きかけ、フシ口にて虎をぞ書きた  
りける。地電目雷威の眼の光り怒り毛怒り斑  
怒り爪。フシ千里も駈けん勢なり。地道犬は姫  
君の行がた尋ね廻りしが。まづ繪書めから  
仕舞はんと太刀を抜かんとせし所に。コハリ  
俄に吹きくる風騒ぎ。繪にかく虎は形を現  
じ。牙をならして吼えかゝる道犬も強力者。  
組止めんと挑みあふ。虎は猛つて爪をとぎ。  
あたり蹴立てて。三重へ揉み合ひしがフシもと  
より不思議の。地猛獸道犬が襟髻。ひつ咬へ  
打ちかたけくるり〜。くる〜。くる  
り〜と持つて廻り。一振ふつて投げけれ  
ば。扉を打越し敷石に。フシ面をすつてぞ打  
付け、る。地虎は勇んで元信の縛を嚙切り。  
背を差向けてそばへたり。元信馳て心付き  
袴の股立しほり上げひらりとこそは乗つた

りけれ。虎は千里の足早く風に嘯く身もかろく。追來る敵を追散しかけちらし。堀も築地も躍り越え。飛び越え。跳ね越え。駈り行く豊干禪師が四睡の虎。李將軍は虎を組む繪にかく虎を動かすは。古今一人乗つたも一人天下一人一筆の譽は。世にぞ三三へ残りける。フシに獸君の。地一靈山野に莠り草木を踏折り。田島を荒すこと斜ならず。近郷の百姓聲々に。詞三井寺の後から藤の尾迄は見届けた。地此の山科の藪蔭へ逃込んだに極つた。地皮に疵を付けずに毆き殺せ撲ち殺せとフシととりく喚き評定す。地庵の内より棒ついて。小提燈さけたる男。ヤ、何者ぢや人の軒。打ての殺せのとは胡散なりとぞ咎めける。いや是は矢橋栗津の百姓ども。此の頃設樂山から虎が出て暴れる故。隣郷が云ひ合せ此の藪へ追込んだ。探させて下されと口々に呼ばはれば。待あざ笑ひやい。虎と云ふ獸が日本に出た例なし。途方もない事夜盗押入の手引か。此の

庵を誰とか思ふ。土佐の將監光信と云ふ繪師。仔細有つて先年勅勘を蒙り此の所に逼塞し。將監年は寄つたれども某は門弟修理之介正澄と云ふ者。地油断はせぬと棒振廻し諍ふ聲。將監夫耨障子を明け聞いたく。天地の間に生ずる物あるまいとも極めがたし。地諸共さがせと鎗熊手提げくゝゑいゑい聲松明ふつて狩立つる。一むら竹の下蔭にそりやこそ物よと火を上ぐれば。暴れにあれたる猛虎の形。人に恐るゝ氣色なく。フシ背をたわめてぞ休み居る。將監横手を打つて。あらし思議や顔輝の筆の。竹に虎の筆勢に少しも紛ふ所なし。是は誠の虎にあらず。名筆の繪に魂入つて現れ出でしに極つたり。然も新筆今これ程に描かんず人は。狩野の祐勢が嫡子四郎二郎元信ならでは覺えなし。何れにもせよ證據には足跡あるまい。地物はためしと百姓ども。若草わけて尋ぬれども虎の足形あらざれば描き手も描き手目利も目利き。前代未聞の名人や

と。心なき土民等も。フシ拜むばかりに信をなす。地修理之介七足退つて師匠を拜し。ア、有難や此の虎を見て。繪の道の悟りを開き候そのしるし。地我が筆先にてあの虎を消し失ひ申すべし。名字名乗を授け御免しを受け度く候と。懇望あれば將監悦びテ、今日より土佐の光澄と名付くべしと。印可の筆を與ふれば修理は戴き墨を染め。虎の順にさし當て四五間間をおきながら。筆引く方に從つて頭前脛後脚。胴より尾先に至るまで次第に消えて失せけるは。フシ神變術ともいひつべし。地百姓ども舌をまき孫子迄の咄の種。詞なうあの上手な繪書殿に。よいおやまを十人程書いて貰ひ。金儲がしたいと云へば一人が聞いて。テ、テテ多年お目に懸つたら。借錢乞の帳面を爰から消して貰はうもの。地お暇申すと打笑ひオクリ在所へ在所へ歸りけり。地爰に土佐の末弟浮世又平重起と云ふ繪書あり。生れ付いて口吃り言舌明らかならざる上。家貧

しくて身代は。薄き紙衣の火打箱。朝夕の煙さへ。一度を二度に追分や。地 大津のはづれに店借して妻は繪具夫は繪かく、筆の軸さへ細元手上下りの旅人の。童すかしの土産物三錢五錢の商に。命も錢もつなぎしが日陰の師匠を重じて。半道餘りを夫婦づれ、フシ夜なく見舞ふぞ殊勝なる。地 夫はなまなか目禮ばかり女房傍から通事して。間 まだ是はお寝りませぬ。誠にめつかりと暖に日も永うなりました。世間は花見の遊山のとさはくざはくざ致しまする。此方は山陰御浪人の。お徒然をいさめのため嫁菜のひたしに豆腐の糞染。地 竹筒でも持ちまして。關寺か高觀音へお供して。春めく人でも見せませうと。夫婦申して居ますれども心で思つたばかり。地 道者時分で見世はいそがし。洗濯物はつかへる仕事にははかいかず。日がな一日立ちすくみ何をやるのらくらと。地 急げばまはる瀬田鰻。只今膳所から貰ひまして練貫水の

津酒。ゆめくしうござりますれども此の春からお仕合がなほつて。鰻の穴から出る様に御世にお出でなされませ。ほんにつべこべくと私が云ふ事はつかし。こちの人喰と私がしやべりと。入り合せたら地 頼もじやと笑ひける。地 北の方聞き給ひ。間 ラ、ようこそ祝うてたもつた。今宵は奇妙なこと有つて修理は名字を免され。土佐の光澄と名乗るぞよ。地 そなたもあやかり給へとあれば。又平時節と女房を。先へ押出し背をつき我が身も手をつき頭を下げ。訴訟有りけに見えければ女房心得進み出で。間 誠に道すがら百姓衆の咄を聞き。身は貧なり不具なり。弟弟子に土佐を名乗らせ。地 兄弟子は浮か浮かといつ迄浮世又平で。地 藤の花かたけたお山繪や。鯨押へた瓢箪のぶらく生きてもかひなしと。身をもんで

は申せしが。お直の願ひは此の時節。今生の思ひ出死しての跡の石塔にも。俗名土佐の又平と御一言のお免しは。師匠のお慈悲とばかりにて涙に。咽び入りければ。地 又平も手を合せ。將監を三拜しステテ疊にくひ付き泣きわたり。間 將監素より氣短く。ヤア又してはく叶はぬ事を吃めが。こりや此の將監は。禁中の繪所小栗と筆の争ひにて。勅勤の身と成りたるぞ。今でも小栗に従へば富貴の身と榮うれども。一人の娘に君傾城の勤めをさせ。子を賣つて食ふ程の貧苦を凌ぐは何故ぞ。土佐の名字を惜むにあらずや。地 修理は只今大功あり。おのれに何の功が有る。地 琴茶書畫は暗れの藝。貴人高位の御座近く参るは繪書。物も得いはぬ吃めが推参千萬。似合つた様に大津繪書いて世を渡れ。地 茶でも呑んで立ち歸れと。地 愛想。なくも吐られて。地 女房今は力を落しこなたを吃に産付けた。親御を恨みさつしやれと頼みなくく又平も。我が咽吭を



かきむしり。口に手を入れ。舌を爪つて泣きけるはフシことわり。見えて不便なり。時に藪の内より將監殿光信殿と呼ばはつて。痛手負うたる若者様先によるほひ立ち。狩野の弟子雅樂之介御見忘れ候か。實にも雅樂之介まづ此方へと座敷に入れ。承れば四郎二郎殿雲谷不破が惡逆にて。難に逢ひ給ふ段々具に聞き氣遣はしと有りければ、さん候某も供仕り。雲谷と戦ひ斯様に深手を負ひ候。頼み切つたる名古屋山三殿は在京。元信危く候ひしがやうくのがれ。落したると承る。爰に難儀の候は。姫君銀杏の前元信を哀れみ。七百町の御朱印を持つて落ち給ひしを。敵奪うて下の醍醐に隠れし由。二度姫君屋形へ移し御朱印奪ひ返さではながく繪師の瑕瑾なり某手負の身は叶はず。御加勢頼み申さんため。忍び参りて候と。語りもあへぬに將監皆聞く迄に及ばず。狩野と土佐とは一家同然力に成つて参らせん。されども彼奴らと太刀打は

いかなく叶ふまじ。姫君にも怪我あらんどうぞ辯舌のよき人に。御屋形の御意といはせ。誑つて取返す分別がござらう。何れも云うてお見やれと額に小皺頬杖つき。各小首を傾くる。又又平何ぞ云ひたけに。妻の袖引背中つき指さすれども合點せず。しんきをわかし女房を引き除けつと出で。師匠の前に雙手をつき唾を飲込んで。討手には拙。せつ者が参り。姫君もゴウ御朱印も。ウ、くくくば奪ひ取つて歸りましよ。將監きつと見。ヤア。面倒な吃め。思案なかばに邪魔いる。地そこ立つてうせぬかと。叱られても怖ぢるにこそ。イヤ。膝とも談合と申す。口こそ不自由なれ。心も腕も天下に怖い者がない。拙者が分別出。叶はぬ時はゑん正祐定あつちへ遣るか。こつちへ取るか。首がけの博奕命の相場が一分五厘。浮世又平と名乗つては親もない子もない身がら一心。命は掃溜の芥名は須彌山とつりがへ。悴の時から舊功なし。命に代へて申上ぐるも師匠の名字を織ぎたい望み。ばつかり。拙者めを遣はされて下されませ申し。申しさりとては御承引ないか。吃でなくばかうはあるまい。エ、くくく。うらめしい咽吭を。搥破つてのけたい女房ども。さりとて情ないお師匠ちやと。スエテ聲を。あけてぞ。泣き居たる。將監なほも聞入れなく。不具の癖の速懐涙不吉千萬。相手に成つては果しなしこれく修理之介。御邊向つて思案を廻らし奪ひ還し來られよ。地畏つたと云ふより早く刀ほつこみ立出づる。又平むんずと抱留めてマ、まんまん待つてくれ。師匠こそつれなくとも。弟子兄弟の情ぢや。此の又平を遣つてくれ殿とも言はぬスツすすつすつ修理様。こりや又平。某やたけに思つても。師の命は力なし爰を放せ。イ、くくいやハ、くくく放さぬ。放さねば抜いて突くぞ。ツ、くき、くく殺せ。ハ、くくハ、くく放しやせぬ。地修理之介もてあつかひ放せ。くくと

フシ捻ぢ合うたり。將監夫婦聲を懸け放せ  
せと止むれども。耳にも更に聞き入れず女  
房取付き。あれお師匠様の御意が有る。地  
おとましの氣違ひやと。もぎ放せば女房を。

取つて投げはたと獄で睨みつけ。おのれ  
迄が氣違ひとは。エ、女房さへ侮るか。不  
具は何の因果ぞやと。どうど座を組み疊を  
打つて。ヌエテ聲も惜まらず歎きけるラシ心ぞ。

思ひやられたる。地將監重ねて汝能く合點  
せよ。繪の道の功によつて土佐の名字を  
繼ぎてこそ。手柄とも云ふべけれ。武道

の功に繪畫の名字。讓るべき仔細なし成ら  
ぬくと云ひ切り給へば。女房居直りサア  
又平殿覺悟さつしやれ。今生の望は切れた  
ぞや此の天水鉢を石塔と定め。こなたの繪  
像を書留め此の場で自害し其の跡の。贈り  
號を待つばかりと硯引寄せ墨すれば。又平  
領き筆を染め石面に差向ひ。これ生涯の名  
殘の繪姿は昔に朽つるとも。名は石痕に止  
まれと。我が姿を我が筆の。念力や徹しけ

ん厚さ尺餘の御影石。裏へ透つて筆の勢。

墨も消えず兩方よりフシ一度に書きたる如  
くなり。地將監大きに驚き給ひ。異國の王  
義之趙子昂が。石に入り木に入るも和畫に  
於て例なし。師。慥つたる畫工ぞや浮世又

平を引きかへ。土佐の又平光起と名乗るべ  
し。此の勢ひに乗つて姫君御朱印諸共に。

取返せとありければはつとばかりに又平  
は。忝しとも口吃り禮より外は涙にくれ。  
踊り上り飛上りフシ嬉し泣きこそ道理なれ。

地將監夫婦悦び心剛にて志。厚けれども。  
舞敵に向つて問答せん事いかあらんと宣  
へば。女房聞きもあへず。常々大頭の舞を

好き。妾諸共連脇にて舞はれしが。節の有  
ることは少しも吃り申されずと云ふ。地や  
れそれこそは屈莫よ。試に一節目出度う舞  
うて立て。あつと名へて立ち上り古き舞を  
身の上に。擬へてこそ舞うたりけれ。舞  
調さる程に鎌倉殿。義經の討手を向くべし  
と。武勇の達者を選はれし。それは土佐坊。

是は又。地土佐の又平光起が。師匠の御恩を  
報ぜんと。身にも應ぜぬ重荷をば。大津の  
町や追分の。繪に塗る胡粉は安けれど。名  
は千金の繪師の家。今墨色を。揚げにけり。

斯て女房勇みをつけ。又もや御意の變る  
べき。はや御立ちとぞすゝめける。カリ、チ、  
いしくも申されたり。身こそ墨繪の山水男。

紙表具の體なりとも。朽ちて朽ちせぬ金砂  
子。極彩色には劣らじと。勇み進みし勢  
は。ゆゝし頼もし我ながら。天晴繪筆の健

氣さよ。唐繪の樊噲張良を楯についたと思  
召せ。お暇申してさらばとて打立ち出づる  
勢は。誠に諸人の繪本ぞとテ。譽めぬ

者こそ。三重なかりけれ。フシ逢坂の關。地  
曙近き火用心の聲高島の屋形には。六角殿  
の姫君行方見えさせ給はぬとて。旅人の改  
め問屋の詮議。フシ土を返さぬばかりなり。地  
又平は今朝七つ立ち門出祝ふ中椽に。例の  
熱燭三杯ひつかけ打立つ所に。やごとなき  
上臈の素足の土に身もくづをれ。伏見の方

よりうろ／＼と是をこな者。京の道を致へてくれ草鞋とやら云ふ物を。穿かせてくれと詞つきの横柄さ。又又平むつと顔に立ちはだかつて返事もせず。女房走り出で大抵のお方でない。威の備つた見所有りとお側に参り。恐れながらお屋形の姫君様と見参らす。我々は土佐の將監が弟子吃の又平と申す繪書の夫婦。狩野の弟子雅樂之介に頼まれ。お迎ひに参る折柄なり必ず包ませ給ふなと。嗚呼ば嬉しけに、自らこそ銀杏の前。道犬雲谷が追手すき間なし。よい様に頼むぞやと宣へば。又平土邊に額をすり付け悦びの色勇みの色。氣を急げばなほ物云はれず心を仕方の腕まくり。りきみ反打ち居合の眞似抜打撫切拜み打。組合捻首手にとつて握拳の武士氣をあらはし。埴生にかくまへ参らすオクリ夫婦が所存ぞ頼もしき。地程なく八町走り井の間屋組頭。組町引具しおこしかへつて聲々に。調六角殿の姫君朱印を盗み出で給ひ。御家老より

御穿鑿裏屋小路も改めよ。別して繪書は屋搜し有る人は勿論犬猫も。地内を出すなと裏口門口ばた／＼と。さしもの又平取籠められ、狩場の鹿の如くなり。不破の伴左衛門長谷部の雲谷。着込の兵百騎許り。むら立ち來つて家々に押入り／＼搜しける。又平一期の浮沈ぞと。女房諸共姫君を押し圍ひ。隣をがばと蹴破つてぐつと抜けたる壁あつき。氷の様成る大刀物さし出す首を片端から。キ、／＼／＼／＼切り並べんと壁に添うてぞ突つ立つたり。雲谷聲をかけヤア／＼是ぞ音に聞く。土佐が弟子吃の又平めが住家なり。地たゞき毀つて搜して見よ承ると一番手捕つた／＼。捕つた／＼とどつと寄せしがしどろになつて引き返し。圓なう怖や凄じや。何かは知らず家内には人々勢充ち満ちて。或は奴の形もあり又は若衆女も有り。人間ばかりか猿猪鷲熊鷹爪を研ぎたてて眼を怒らし寄付かるゝ事でない。地なう／＼いやと身ぶるひし。フシ舌

を捲いてぞ恐れける。地何を吐す狼狽者。人三人とも住まれぬ荒屋何者が在るべきぞ。察する所見世に張つたる三文繪を生物と見違へしか。怖いと思ふ心から眼が眩んだ腰抜ども。地これ／＼都をこぢ放せぬるい／＼と下知すれば。書口をひつかけるいや。えいやとなんなく見世をこぢ放しける。コハリ内を見れば不思議やな云ひしに違ひも荒奴の。影ともわかす。幻ともまだぼのぐらき曉の。烏毛の鎗先揃へしは。土佐が魂寫し繪の。精靈なりとも知らばこそ我も／＼とかけ向ひ。打てども突けども手に取られぬ露の命を君にくれべいと。染めし奴服嫌ひなし。フシ相手擇ばず防ぎたり。地雲谷が弟子長谷部の等嚴數にも足らぬ糟奴。我に任せと捲りかゝれば。片肌ぬいだる立髪男。大盃をひらり／＼と閃かし。眉間にふつたる唐辛。ヲチから。ヲ、からからにしき。フシあやめも分かず引返す。師匠の雲谷埴りかね。片端より打ちみしやぎ。手並を見せんとコハリ

飛んやかゝる。やさしや優者の。女業にはきどく頭巾。藤のしなへを押取りのべ。ひん纏うてはたと打ち。しと、打つをひらりと外し受けつ。ほどいつ地あさ衣のフシ玉襷。かひぐしき若き法師の現れ出で。勇みかゝれる。有様は。なみや鯨の瓢箪々々。持つて開いて鉢叩き。叩けばすべり打てば滑りぬらり。くくと手にたまらず。フシあぐみ。果ててぞ支へたる。地不破が郎黨犬上團八。そこ退き給へ人々と。打つて出づるや現の間の。座頭一人とほくと。とほつく杖を振上げ。くく盲打に打つてんけり。あまさし物とついでかかる。團八が弟犬上三八。二八ばかりの少年枕がへしの曲枕おつ取り。くはらりくはらはらはら。うつ波枕かす枕枕がさねに打ち亂れ。フシちりぐにこそ引いたりけれ。地伴左衛門怒りをなし手にも足らぬ難人輩。しや何事か有るべき武士の刀のあんばい見よと。眞一文字に駈けたりけり。あら凄じやこはい

かに姿は沙門かしらは鬼神。鬼の念佛嚙みくたく。牙を鳴し角をふり向ふ者の眞甲揃木を持つて叩き鉦くわん。くくくわん。耳にこたへ骨に浸み進み兼ねては引足も準荒鷹驚熊鷹一度にさつと飛び來り群がる勢を八方へ。追立て蹴立て啄き立て。翼の嵐夜明の風三鷹の聲々々。逢坂のフシ木綿着鳥に。地しらくと白み渡れば白紙に。有りし形は彩色の。繪に寫りたる筆の精フシ天骨の。妙とも謂ひつべし。地又平勇んで女房の袖を引き。物は云ひたし心進んで舌廻らす只ウ、くくとばかりなり。同エ、爰な人。敵が詰めかけ事急な。廻らぬ舌をいはれぬこと。地舞でくといひければ。チ、。舞れよく氣がついた。今日前不思議を見よ。我等が手柄で更になし。土佐の名字を繼いだる故。師匠の恩の有難さよ。敵の中へ駈入つて。命限りに追散さんと。大勢に割つて入り西から東北から南。蜘蛛手かくなは十文字。割りたて追廻し。散々に切立

てられ。さしもの軍兵。地堪りかね八方へ逃散つて。フシ残る者こそなかりけれ。地さあしてやつた此の上は。コ、くくく爰には片時も叶ふまじ。都の方へと板君をヲヲくくく逢坂山の時鳥。まだ初聲の口は吃り心は鐵石かなおとがひに。勝つたすぐれた越えた峠は日の岡の。石原草原足もしどろにどくくく吃り廻つてのゝのくく上りける。

中之巻

印籠阿瑪港珊瑚珠はさもなくて。大創五ヶ所肝先にとめありと委細に書き付け管領所へ訴へさせ死骸を圍ふ横櫛子。二階から女郎買手遣手の龜は首のばし。松は寝ほれた顔出しまだおきくの禿ども。つね彌いく野と手を引舟も走つて来て。塀に鞍かけ木に取付きかほる様あ見さんせ。吉野様の大膽な掃溜山へ上つて。海老の皮で足突かすすな突いたら大事か。斬られて死ぬる人さへ有ると。フシあだ口々のやかましさ。詞あの斬られてゐる人は葛城様の大盡。不破の伴様に似たぢやないか。ほんにさうぢや伴様に極つた。地サア伴左衛門が斬られたと京童の物見だけく。手負見がてら傾城見に。フシ群衆はおしも分けられず。地すはや檢使と人を拂ひ背領の雜色。供人引具し死體を解いて疵改め。詞江州高島の執權不破の伴左衛門に極つたり。さて此の者の買うたる傾城は何と云ふ。意趣ある者の覚えはなきか口論などはなかりしか。眞

直に中せ當分隠して。後日に知れなば曲事なりとぞ仰せける。年寄罷り出で。上林の葛城と申す大夫を。千二百兩にて請出さるる筈の所。名古屋山三と申す浪人家と葛城と。行末深い約束とて談合なりかね申せし故。兩方意趣を含み居られしが。是ならで覺え候はずと詳かににぞ云ひわくる。雜色一々口書し。名古屋山三は浪人なれども元は伴左と傍輩。地かたぐい大事の詮議なりまづ葛城が遣手を呼べ。遣手出ませと呼ぶ聲に玉は臆病年寄なり。やら恐ろしや私が出てなんと言はう。縛られたらどうせうぞ。なう悲しや目がまうたステエ氣付は無いかと泣居たる。地是では埒が明くまいとれぞ氣轉な遣手衆を。頼んで見んと云ふ内に出ませくと地頻りの使。エ思ひ付いた一文字屋の和國に附いてゐる。みやと云ふ遣手は。越前の敦賀で。遠山と呼ばれた全盛の大夫。戀ゆる今はあの體すどけなうて

のみやを頼まう。地あれく彼處へ大福帳かたけて来るは。みやぢやないかといふ所へおしよほからけのいそがしげに。詞皆さん是にござります。詞まあまあけうとい事が出来まして。御苦勞でござんす。地言ひ捨て通るをこれくおみや。詞檢使の衆葛城が遣手を召さるれども。玉は愚鈍で臆病なり何をお問ひなされうやら言ひ教へてすまぬこと。廊中の頼みぢや葛城が遣手に成つて出て。請返答をしたも恩に受けうと言ひえづ。地さりながらいやと云ふも仔細らしく。地言ひ損うたら大事か。口に任せて遣つてくれよフシてんほのかはとぞ出でにける。地雜色鐵鞭横たへ。汝は葛城が遣手めか。用有つて召出すに何として遅なはる。横着者氣隨者と嵩をかけて叱らる。ア、彼のさんわいの頭から叱らんす。なんの氣隨でござんしよ十二人の大夫様を一人して廻せば。地辨慶遣手が忙しき口説の中をおし

隔て。打物業にて適ふまじと日に幾度の詫言やら。よるの身持は揚屋の吸物同然。ちよつちよと座敷へ出る度に一杯宛も飲む酒に。ふらく眠りの行倒れ。朝から晩迄緋の袴花色種子の巾着も。中は秋の夜の長紐。さけた縫の穴から天をのぞけばほのほの明。妓様達の身仕舞風呂の手洗水の髪洗ひの。鍋よ杓子よ曰よ杓よ。正月しまへば節句朔日今日は二日の拂日なり。灸も据ゑ

たし卯腹辰股脊中に腹。商賣には換へられず皮切こらへて出る心。其の様に云はんすな廓は諸國の立合。常住切つての撲つてのと。是程の喧嘩は。お茶の子く茶の子ぞや。フシア、仰山など笑ひける。雑色怒つていやさ汝が身の上は問はず。此の伴左衛門千二百兩にて葛城を請出すとな。傾城は賣物直段極まる上からは。名古屋山三が妨言つても叶はぬ筈。然るを違亂に及ぶとはうぬ等が奸曲と覺えたり。斬手も知らいで叶はぬ筈眞直に申せと詞荒く問ひかく

る。少しも隠せず會釋して。御意の通り賣物とは申しながら。神佛の奉加と同じこと。銀出しながら拜まするは恐らく世界に傾城ばつかり。地買うてくれるが嬉しいとて親がかりやお主持の。戀路の闇の一寸先見えぬ所を側から見て。買人のお身も廢らず女郎ものほさぬ様に。舵を取るが引舟目の鞘外すが遣手の役。大事にかける證據には世間に心中十あれば。廓に一つ有るかないが。御主人のお耳に立ち。お身の妨とも成る時は御一門の評議にのり。詞人を剥ぐの欺すのとおつる所は廓の難。爰の意氣をたてるが色里の嗜。身請の談合破れたも伴左様のお身の上。大事に思ふ上の事でござんす。地道で斬られさんしたはそこ迄は存じませぬ。定めし死にともあるまいし尤逃けても見さんしよし。そこに如才もあるまいが先の相手が強い。身の取りまはし

のわるさにか。フシ知らんでやんと答へける。地檢使の人々もてあつかひよいわくもう黙れ。一時に詮議成り難し死骸を酒に浸し置き。後日の評定たるべしそれくんとて役人共。桶をしつらひ死骸を納め。洒波み入れて繩がらみ。籠屋へやれと昇上げた。雑色重ねて年寄々々。商賣なれば傾城には構ひなし。さりながら夜前よりの買手ども事済む迄名と所を。一々に書き留めよこりや遣手め。地重ねての詮議には水

くれる用心せよと。嚇して立てどもおぢもせずエイおかんせ。銀くれる遣手に水くるとは。悪識など。笑ひを機に云ひじらけ先を拂ひて立歸る。權威を見せて突鳴す鐵棒の音三味線に。引き替りたる三筋町戀の。市場と三重なまめかし。フシ名古屋山三。春平は。通ひなれにし六條の。道には石が幾つ有る迄。よみ覺えたる一貫町のフシ茶屋が。霞賣のよしやよし。地廓に擲つ命ぞと。大門口の與右衛門も門番には二代の後胤。平の供して口軽く。フシ舞鶴屋にぞ入りかけ

る。地檢使の人々もてあつかひよいわくもう黙れ。一時に詮議成り難し死骸を酒に浸し置き。後日の評定たるべしそれくんとて役人共。桶をしつらひ死骸を納め。洒波み入れて繩がらみ。籠屋へやれと昇上げた。雑色重ねて年寄々々。商賣なれば傾城には構ひなし。さりながら夜前よりの買手ども事済む迄名と所を。一々に書き留めよこりや遣手め。地重ねての詮議には水くれる用心せよと。嚇して立てどもおぢもせずエイおかんせ。銀くれる遣手に水くるとは。悪識など。笑ひを機に云ひじらけ先を拂ひて立歸る。權威を見せて突鳴す鐵棒の音三味線に。引き替りたる三筋町戀の。市場と三重なまめかし。フシ名古屋山三。春平は。通ひなれにし六條の。道には石が幾つ有る迄。よみ覺えたる一貫町のフシ茶屋が。霞賣のよしやよし。地廓に擲つ命ぞと。大門口の與右衛門も門番には二代の後胤。平の供して口軽く。フシ舞鶴屋にぞ入りかけ

る。地亭主傳三を始めとし、數多の女郎遣手迄。是はく、様子はお聞きなされうが。まづ四五日もお出なされぬがよい筈。日頃意趣ある伴左衛門斬手は名古屋山三ぢやと何處ともなしの取沙汰。葛城様のお案じ我等夫婦の氣遣ひ。此のおみやが辯舌で今日はすらりとやりましたが。伴左衛門が死骸を奈良漬にして後日の詮議。殊にお客の名と所書き記せとのいひ付。お身に覺がなうてから詮議まんぎも喧しし。お前を外様へ歸はせて此の傳三が立ちませぬ。帳面に留めぬ間に、フシまづお歸りといひければ、傳三や傳三さうでない。お手前こそ念頃。廊中の女郎衆へ苦勞をかけた此の山三が、穿鑿にあふ悲しやと屈んでゐる程ならば。里浦ひも妓交りもあたまからせぬがよし。まづ和國様から御禮申す。大事の遣手をお貸しなされ忝い。扱みやの働き心ざし詞の禮はいふ程古い。三千石取つた山三が手を突いて頭を下ける。額に千石兩の手に二千石。

地主人の外一生に。此の式作法はみや一人。是が禮ぞと手をつけば。ア、勿體ない何のお禮が入りませう。ちよつと葛城様に逢はせて去なせましたい物ぢやが。わたしが行けば目に立つ。和國様一筆進せて下さんせ。いや文もいかぢや私等直に誘つて。遊びに出る顔で連れまして來ませう。サア皆ござんせとフシ座敷をこそは立ちにけれ。地然らば爰は人もくる。二階へお通りなされといへば。ア何が怖うて隠れうぞ。伴左衛門を斬つたるは誰かと思ふ。此の山三が手にかけて討つて棄てたるぞ。葛城が意趣は僅の事彼めと傍輩たりし時。狩野の四郎二郎を身が取持ちにて奉公に出せし所に。伴左衛門親子雲谷といふ繪師を引き。御在京のお供の留守無實をいひかけ刃傷に及び。四郎二郎は行方知れず。刺へ外戚腹の姫君銀杏の前。四郎二郎に心をかけ御祝言有る筈を。妨入れて狼藉し某迄も讒訴し。浪人の身と成つたれば重々の遺恨あり。殊に四

郎二郎は隠れもなき名筆。大内繪所の官にも進む身を。某強ひて國に止め難儀をかけて見てゐられず。姫君と夫婦になし四郎二郎さへ出世すれば。本望々々生けて置かば四郎二郎に如何なる仇をかなすべきと。傾城の意趣を幸に討つて棄てたる伴左衛門。地知れて切腹するばかり四郎二郎故に捨てん命。聊か惜しいと思ふにこそ武家に生れた不祥には。大門口で立腹切り新造衆や禿ども。芝居でするやうな事して見せうヤア葛城はどうぢやの。亭主唄へと三味線の轉手に顔をすぢかひ身。絲の音色も目の色もフシ人を切つたる體はなく。地亭主はけつく色遣へ先づお咄はいらぬ物。内外の者ども必ず仇口聞くまいぞと。わななくふるひ手酌にて、フシ減多に飲んでぞ居たりける。地みやは聞くより驚きて扱は我が二世迄と。思ひ込だる四郎二郎様にかく迄深き恩を見せ。お命をも捨てんとはア、頼もしや忝

やく。姫君とやらへ聞えては。御祝言の邪魔どと遠さけらるゝは知れた事。地只餘所ながら彼のお方の爲に成り。お命を助けるこそ我が夫への奉公と。思ひ定めてこれ傳三様。お侍の覺悟の上を女子の料簡推參なことながら。あのさんに腹切らせ恩を受けた四郎二郎。何國の浦で聞付けてもよもや生きてはゐられまい。地人の所縁は。知れぬ物どれからどれへどうつて。誰が悲みとならうやら山三様のお身の難。遁るる工面はあるまいか思案は今でござるぞやと。よそを言ふのも夫の事。案じて餘る涙の色ヲ胸撫で下すも道理なり。ア、汝が身がいふ通り。押取つて廓の迷惑お仕置には法が有る。腹切りたいとおつしやつてもようあたゝかに。見苦しい罪に粟田口下からどうも量られぬと云へば。山三はつとしてア、ウよい所へ氣が付いた。三味線どころでないわいの。相手は主持ちこちは浪人。暴れ者にしなされ木兎の留つた様に獄

門などに曝されては。先祖一家の恥辱今さら有り。爰へよりやと小聲に成り。是をつぱりと腹切つても。其の段からは死骸迄いにて葛城様を。とんと請出し奥様に定め彌恥は重り成る。地エ、主持たぬ身の無念。時に親方と肌を合せ。手形の日附をとさよと。エ、齒切を。してぞ涙ぐむ。みやつと跡の月にして。外様へは借宅見たてのは聞く程我が男の。身に逼りくる悲しさの。其の間廓に少し逗留分。すれば御夫婦と云どうぞよい分別して。進せて下され頼みまふものよ。昨日迄伴左衛門が。くだいた狀





文握つてからは密夫の證據たしかなり。女  
 敵討は天下のお許し千人切つても切り徳。  
 此の分別はどう有らう。抑みやは悦びヲ、  
 できた。目出度いく智慧者めとあふ  
 ぎ立つれば、詞ア、むしやうに目出度がる  
 まい。當分請出すお銀がない。若しお腰の  
 物をそれ迄の質物に遣されば。私加判で  
 太夫様をたつた今門を出して見せませうか。  
 お侍にお腰の物とはなうおみや。どうも申  
 しかねるわいの。ハテお主のお身ばかりか不  
 便になさるゝ四郎二郎迄。命を助かることな  
 れば御料簡あそばしませと。手を合せる  
 やら歎くやら山三も共に涙を浮め。チ、く  
 何がさてく。皆の衆に苦勞をさせ。何し  
 に否と云はれうぞ近頃過分千萬コレ。是は  
 重代の左文字二千五百貫の折紙有り。地惜し  
 しとは思はねども。七歳の時より今日迄。つ  
 ひに脇差一本で。他所に居た事知らぬ身が刀  
 の冥加に盡きたかと。涙は雨や鞍鞆の  
 脇差ばかりで奥に入るヲ後姿を。見送り  
 あり。



八丈の拾もござんすと歎けば共に泣聲の。  
ヲ、奇特キョクテツによ言やつた。俺も男ぢや氣遣  
すな。曠カウを總嫁ソウカに賣つてなりと袴を明けぬ  
といふ事はフシないて出づるぞ頼もしき。

フシみやが憂き身の。憂き思ひ。口でいはね  
ば氣につかへ。目に流るゝは百分一胸に涙  
の滯とどり山三様に骨折るも。男の心のフシ悲  
しみを。思ひやり手となつたるものウぞん  
ざいでなれうか。戀が嵩かさじて遠山が此の  
態ざいになつたとは。知らぬか聞かぬか男めが  
何處どこに居るやら死んだやら。梨も噤つぶもうつ  
とりと煙草タバコのんでも煙管タバコより喉のどが通らぬ薄  
煙タバコ。人の見ぬ間に思ふ程。スエテ泣くを所在どこ  
か。あちきなや。地内を首尾して葛城は走つ  
て来るよりかけ上り。圓みや殿爰ここにかいか  
い世話であつたけな。忝かたじけいぞや土になつ  
ても忘れはしませぬ。おれが心を察してた  
も。ほんに〜物日なかに瘦せたわいな。  
こなたは今は何の苦もなうて樂である。遣はな  
手の身は羨しい。地山様は奥にかの。ちよつ

と逢うて來うぞや。後に〜と云捨て、  
行くを見るにもなほ涙。地辛いぞ愛いぞ  
といふ中にも。男を傍そばへ引きつけては。憂うれ  
を凌しのぐも力が有る。此の身には苦も有るま  
いとや。明暮あけくれつきあふ人目にさへ樂な様に

見えるもの。遠國隔とくてた男氣に思ひやりの  
ない事は。無理ともいはれずさりとては。  
せめて在所あそこが聞きたいと、ッ聲を。立てね  
ば泣いじやくり。地氣もしづ。み入る時しも  
あれ心細けな鼓弓太鼓の聲。哀れ催もよほす相あひまのギン  
オクリ山我やまがに相あひま山涙を添へよとや。ゆふべの  
朝あしたの。鐘かねの聲寂滅じやくめつ。爲樂ためがくと響なげども。聞い  
て驚く人もなし。圓通りや。只の時さへ相  
の山聞けば哀れで涙が零こぼれる。地悲しゆて  
成らぬどうぶくらに。あた聞きともない通  
りや。通りやフシといひて涙を押拭おしぬぐふ。相ノ山  
野邊より彼方あそこの。友とては血脈けつみやく。一つに數  
珠しゆじゆ一連いちれんこれが。具土の友となる。圓ア、舌垂したた  
い手の隙がない。通りや〜といへども心  
に苦のない新造しんぞう亮りやう。ばらばらと走り出で。

圓こちら好すちや相の山。地聞いて泣きたい  
所望しよぼう々々と立ちかゝる。圓エ、意地の悪い  
子供ぢや。それ程何が泣きたい事。地遣やつ  
て往いなそと巾着ひんちやくの紐ひもをといて取出だす。錢  
は一錢二世の縁切れてもきれぬ笠の内。泣

沈みたる顔見れば戀しゆかしの四郎二郎。  
互にハア。ハア、とばかりに目くれ。心  
はしみ〜と。抱付だてきたうもあたりには禿  
が目許めもと小さかしく。こらへるだけと包めど  
もスエテむせびふくろび泣きむたり。圓ア、  
去いなせましたらよい物か。まちつと哀れな  
所を唄うて聞かせて下さんせ。地あつと涙  
にするさゝら胡弓こきうの弦ひもとも細き聲。相ノ山定め  
なき世に。捨てられて身の寂。滅めつが知らせ  
たく文は。書けども便りなし。合あの手ひとり。  
寢覺ねがの友とては夢に。見た夜の面影が。是  
が。寢覺ねがの友となる。地折しも二階奥座敷  
こいよ〜と手を叩たたく。あい。〜地あい  
と禿ども。立つ間遅おそしと走り寄り。これ斯  
うした事もあらうかと憂き命をも捨すてなん

だ。よう顔見せて下んせと。縋れば男も抱き締め涙の。外は聲もなし。なう戀しいのゆかしいのとは大抵戀路の習ひぞや。それをとんと打越して主親方にも背きし故。

奈良伏見迄賣渡され今此の京で遣手となり。花の都も我が身には鬼界が島に住む心。朋疎瘡に苦しみても手足の苦勞は成りもせう。心を痛めるばかりぢやない力業にも才覺に

も。叶はぬ物は逢ひたいと。思うて遺瀬がなかつたとフシ甘え口説くぞ不便なる。四郎二郎も盡きせぬ涙ヲ、道理々々慙然や。

度々文でも云ふ通り。其方の蔭にて大事の繪を書き譽を取り。契約違へず身請をせうと思ふ間に。不慮の事ども命があるといふ

ばかり。恩をきた名古屋山三我等故の浪人。行く先もく目出度いと云ふ字は書き様も忘れて。今は團扇の繪蘆屋釜の下繪に露命

を繋ぎ。大津で問へば奈良にといふ。難波で聞けば伏見とやら。是は采女雅樂之介二人の弟子の介抱で。丸四年目に顔を見て嬉

しいことはどこへやら。俺と云ふ者ないならばとうによい仕合。前垂鍵はさけまいと親御の事まで思はれて生きた心はせぬぞとて、エテ男泣きに泣きければ。ナウさう打明けて下んすが本々の御眞實。わしはいつそ

親のこと思ふ所へいかなんだ。わたしに爵が當らずば當る者は有るまいと口説き立つれば四郎二郎二人の弟子も共涙。の竹も

古へのフシ紫竹に染むるばかりなり。稍有つて四郎二郎先づいふべきは。名古屋山三

春平此の所にて不破の伴左衛門を討つて。詮議にあふ由洛中の是沙汰。遺恨のものは某故聞き捨てて置かれぬ挨拶。廓の説はど

うぞといへばさればいなア。詳しい事も聞きました山三様にする世話は。こなさんへの奉公とさまく心を碎いて何の波風ない

様に。十の物が九つ追付け埒が明く筈で。あれく奥にぢやわいなア。是は大慶先づ通つて對面せう。イヤく待たんせそりや

せねば侍が廢ると。今も今云うた人に逢はずといんで下さんせ。エ、愚痴なことばかり。我故に一命を果さうといふ山三ぢやないか。逢はずに歸つて人外の名をとれか。地異しう逢はせまいなれば爰で腹を切らう

かと。脇差に手をかくるハテ死なんせではないわいの。外に奥様持つまいといふ誓文立てて逢はんせ。ヲ、姫君はさて置き。たとへ餅屋のお福でも。山姥と祝言すると

も。山三が言葉を一旦立てずに置かれうか。地エ、世間見た様にもない氣が狭いぞやと恥しむる。世間は唐土迄知つても氣は

武藏野程廣うても。大事の男を人には添はさぬ。山三様にあうて四郎二郎が女房は。此のみやでござんすと罷り出でて斷らう。

胸ヲ云ひ度くば言や詞の中に脇差を。此の腹へ突込むサアどうぞくと地詰められ

て。泣くより外は何をいふも大切さ。そんならいふまい息災でゐてくだんせ。さりながらどうぞ言ひ抜けらるゝなら。言ひ抜け

て見てくだんせとまだぐとくの忍び泣き。

尤々男の面役。かういふとてなんの如才が

有る物ぞ。弟子衆こちへと涙ながら奥へ行

く間も惜まれて。これ采女様雅樂様。祝

言の咄が出たらひひ消して下さんせと。

頼む返事の否應はフシ涙に紛し入りにけり。

地心許なさあぶなさに心騒ぎて落付かず。

襖の際にさし足し。立聞きすれば伴左衛門

を討ちとめた物語。ア、嬉しや女房事は

出ぬさうな。まらつと聞かう。あの唄きは

何ぢやしらぬ。聞きたい迄と耳をよせ。

ア、悲しや連れて歸つて姫君と。女夫にせ

うといひくさる。こちの男が精巧さうに。

こなたの詞は背きませぬと。地吐かしづら

は何事ぢや。エ、聞かまい物を腹の立つと。

耳を塞いで立ちつ居つ。フシ身をもみ歎くぞ

哀れなる。舞鶴屋の傳三郎遣手引舟下

男。いきりきつて大聲あけ。こりやく

葛城様の身請さらりつと持明いた。跡の三

月二日に暇をやるのと一札。王様の御給旨

より高直な物握つた。乗物の戸をくわらり

と明けて今でも大門をお出でなされと。

わめく聲に人々悦び走り出で。ア、お

手柄く酒呑童子の首より取りにくい事。

主持たぬ身は爰が過分手を引合うて門を

出て。名古屋山三と葛城と後々迄の咄を残

さう。ヤア亭主近付になつて置きや。狩野

の四郎二郎元信廻り逢はうばかりに。互

の苦勞は知る通り。身は葛城を請出す。四

郎二郎は大名のお姫様を掘り出す。祝言の

夜は勝手へ見舞や。扱みやの禮は今申さ

ぬ。前垂鑑を捨てさせ。武家か公家か町人

か望み次第に数ならねども。拙者が親分先

つ姫君の祝言には。女郎に頼まうと勇み

かけても投首に。目も泣きはらして返事もせ

す妹へ兼ねてつと出で。云はんとするを

四郎二郎柄に手をかけ腹を擦れば手を合せ。

泣くく退れどなほ堪られず思ひ切つてい

はんとす。四郎二郎胸押明け既にかうよと

見せかくる。ア、申し四郎二郎様私

やなんにも申しませぬ。御息災で姫君と。

夫婦になつて下さんせと。スエテわつと叫び

伏しければ。共にせきくる四郎二郎ヲ、よ

い合點く。廊の衆は涙もろく目出たい事

にも泣きたがる。身請する女郎衆に名残惜

しいは尤ながら。他國へ行かず死にはせず

追付け逢はう泣きやるなど。地よそにいふさ

へ包みかね目はうろくとなりけり。アお乗物が参つた早うお出でなされませ。

いやく乗物古いと立出づれば。一家の太

夫天神園葛城様さらばや。さらばでござんす

門迄送れあと賑やかし。打つたり舞うたり。

舞鶴屋傳三が萬うけこんだ。おきみやけを

遣手衆お春お夏と男めども。みやが心はあ

きからの。腰の巾着ぶらくと物寂。しけ

にぞ三見えにける。フシ花の三月。

はや過ぎて娘の年も廿棹。いつのまにかは

長持に桐の葉茂る嫁入月。銀杏の前の御祝

言名古屋山三の計ひにて。四郎二郎元信を

北野の社人に借座敷。名古屋が家の子世繼

瀬兵衛興添にて。供女中の出立や。地黒淺  
黄紅椀皮ゴウベニフシ右近の馬場にぞ着き給ふ。並  
木の櫻暮れかゝりまだ人顔も。白無垢着た  
る若き女の横合より。嫁入の供先押し割り  
押し割り打つも擲くも事ともせず。しつか  
と縋つて引く程に乗物の戸は碎けて放れ。  
姫君あつと叫び給ふを胸ぐら掴んで引きず  
り出し。土手に押しつけ引つ据ゑたり瀬兵  
衛刀の反を打ち。六尺ロクシヤク徒士の衆おつ取廻し  
そこを放せ放さずば。撲ち殺せ捻ぢ殺せと  
口々に呼ばはれば。姫君制してア、黙つ  
てみや構やるな。嫁入する身に女の際で只  
の事とは思はぬ。四郎二郎殿の妻か但し時  
の戯れに。末では妻にせうなどと男の當座  
まに合を。一筋な心から其の恨みでござら  
うの。我が身に知らぬ事ながら。殿を持つ  
役なれば聞くまいとはいはぬ。道理さへ立  
つことで負ける道なら負けませう。又筋も  
ない道いゝてみや我にも手も有り足も有る。  
銀杏の前が理不盡と云はれては大人氣な

い。相手向ひにしておきやサアなんぞ聞か  
うと。口は陸路をわけながら。胸はしどろ  
の山坂や、フシ顔は躑躅の如くなり。女ため  
いき顔をあげ。ア、流石でござんす。其  
の美しい出やうには。かう取つた胸ぐらを  
放し様に困つた。地我とても中々狼藉する  
氣は微塵もなく。お乗物に縋つて歎きを申  
し。お情を受けうと。七本松から跡先には  
竄竄すずすずひひ參りしが。あたまのかゝりがどう  
もなく。思はず慮外致せしなり。仰々しい  
白無垢着たは。討果してのなんのといふ。  
威しでも見せでもない。思ふ願ひが叶はず  
ば西所川原か舟岡へ直に飛ぼうと思ふ氣で。  
妻が爲の修羅出立ち高いも卑いも女子には。  
大なれ小なれ此の氣はあれどいはぬで持つ  
た世の中。色に出さぬを嗜と心で心を吐つ  
て見ても。いかなる慾も離れうが男に慾は  
得離れぬ。さりとは穢い氣恥かしゆうご  
ざると聲をあけ、フシ譯をも。いはず泣居た  
り。瀬兵衛を始め女房達御祝言の時刻逸

ふ。道行ばかりいはずとも。入る事ばかり  
申せ〜と責めければ。ヲ、御尤〜。  
私は土佐の將監が娘むすめ名はお光親の憂き瀬  
に身を賣り。越前の敦賀で遠山と申せし流  
れの者。四郎二郎殿とは故有つて。起請一  
筆書かねども釘鏝くわがより離れぬ中。身を持  
ちくづし方々をうろたへ。今は六條三筋町  
上林が内みやと云ふ。流れの身よりあさ  
ましい遣手はしてもおのれやれ。一度は狩  
野の元信が内儀といはれう〜と。四年が  
間の氣の張弓はつたりと弦きれて。泣くに  
も力あらばこそ。無理ともそんなも餘り無  
法な事ながら。長うは入らぬ一七日今宵の  
嫁入を下されば。跡はお前と萬々年七日添  
うて別れて後は。此の世の生い見みせまいし。  
たとへ死んでも彼の人の未來の回向は受け  
ますまい。もう此の跡は申しませぬと。フシ  
涙を流し手を合せ、フシ、伏し轉ぶこそ哀れな  
れ。姫君呆れておはせしが。聞けば笑しい  
たはしや。いやと云はば大抵どうよく者と

いはれず。心得たというてから迷惑するは我一人。新枕はどうかうと競ひかゝつて行く嫁入。道から貸して歸るとは話にも聞かぬこと。こちや義理すくめになつたかとスエテ 聲を上げて。泣き給ふ道理の上の道理

なり。やゝ有つて涙をおさへ。ム、よしよし合點した。爾そなたが其の思ひからは男も心にかゝる筈。二人の縁の離れぬ中へ嫁入してをかしようない。蓋も懸子も打明けたこそ女夫なれ。男を貸してやる程に互

の心を暗らしたも。さりながら餘り懸子を明け過し底抜きやつたら。こちや聞かぬと。涙ぐみつゝ宣へば、有難やと遠山は。姫君に抱き付き貸すお心より借る心御推量遊ばせと。泣き聲よそに。飛梅の、フシ神も憫み。給ふべし。地サアとてもなら早いが

よし元信は孫てより。傾城好と聞きし故。此の小袖を見や廓模様にいひ付けた。是着て行きやと襦袢脱いで七日といふもいまいまし。來月一ぱい貸すぞや。ア、お志は有

難けれど。終に別るゝ此の身なり。然らば七々四十九日が中は私が妻と思召せ。此の分で死んだらば定めし男の餓鬼道へ墮ちませうと。泣くゝたてば姫君さういうて皆吸干しやんなどこそ少しは残したも。

こちは是から腰元つれて歩いて戻る。あの乗物で皆供しやと歸るさを見て遠山は。姫君様のお情程我が身の罪は重なる。借る時の地藏菩薩に捨てられ返す時の閻魔の廳。どういふて逃れうと涙をかこふ神垣や。神も佛も見通しに。酸いも甘いも梅青む北

野の。借屋に。嫁取のフシ嫁の手道具。地御厨子鏡臺うちみだれ箱。葛籠貝桶挟箱。長刀持たせて遣手のみやが來るとは思ひがけもなし。其の心底の屈きしこと姫君の情といひ。かたぐゝ黙止がたければ門弟雅樂之介采女準人。大學などと宗徒の弟子ども。

すべよくまかなひ春平にも内意を得。表向は銀杏の前御入り有りしと披露すれば。方方の音物樽よ看よ巻物よ。太刀折紙の馬代

銀五十目がけの蠟燭の。明けぬ暮れぬと賑ひて今日五日目のあさ上下。雑煮の黒餅子持筋。オクリつきづきへしくぞ見えにける。其の日もやうく。地かたぶく頃名古屋山三春平はお見舞申すと案内ある。雅樂之介

出迎ひ。先づもつて此の度は姫君様御料簡美しく。おみやも念晴れ元信も落付き申すこと。地皆是貴公の御蔭門弟中も忝く。悦び存じ候と。フシいづれも禮をなしにける。是は迷惑元信爲と存すれば。各同然の大慶。さて今日は五日目五百八十の餅搗いて。里

歸りといふこと縁邊の式法なれども。親元は遠所祝うて我等が宅へ呼びたいと。葛城も申すがちよつと尋ねて見たいとあれば。雅樂之介笑ひイヤ尋ぬるに及ばず。纏て別るゝ日切の女夫寝入る間も惜しいとて。顔と顔を突合せ頭も振らぬ舌たるさ。地里

歸りはさて置き臺所へも出られませぬ。夫は仰な喰付様さうして互に飽かせたら。跡の爲には珍重元信筆は達者なり。一日一夜

に半年のフシ事は出来うと笑はるゝ。地  
斯かる所に無紋の色に淺黄の上下。編笠取  
つて入るを見れば舞鶴屋傳三郎。出口の奥  
右衛門打ちしをれたる風情なり。詞名古屋  
を始め門弟中興さめて。これ傳三あんまり  
それは粹過ぎた。聞かぬといふこと有るま  
い葬禮の戻りに。祝言の家へ立寄るは無禮  
すぎた不道化。可笑うない歸れ〜と苦々  
しく叱られ。鼻打ちかみて目をすりすり。  
姫君様の御祝言と遠慮致して見ましたが。  
わきから沙汰が有つてはお恨みの程も如何  
と。女房が心を付けまして。今日七日目の  
墓参り。ついで乍らのお知らせ。地常々氣  
立が結構で。おみやといはず佛々と申した  
に。あつたら佛もやくたいもない。骨佛に  
してのけたと。ステサめ〜とぞ泣きゐた  
り。地人々更に誠とせず酒に酔うたか狂氣  
か。みやは少し様子有つて姫君に代り。四  
郎二郎と祝言し。五日前より奥に夫婦並ん  
でぢや。阿呆たことを吐かすまい。イヤ私

を阿呆になさるゝか。七日前に死んだ人が  
五日前に来る物か。蓮臺寺專譽様の御引  
導舟岡山で灰になし。地和國様を始め女郎  
衆から名代に。禿どもが灰寄せ五輪まで立  
てたもの。何の偽り申しませうと眞顔にい  
へば人々も。ぞつと怖氣も立寄りて。詞し  
て眞實かどうして死なれたことぞといへ  
ば。眞實かとはいとしほげに常が癪持ぶら  
〜とはしながら。一日と寝られたことも  
ない人が。いつぞや葛城様身請の晩から頭  
痛するとて引き込んで。地それから枕上ら  
ず次第に重つてくる程に。お客様ひき〜  
て。柳原の法印様半井の御典藥幸ひと和國  
様へ。對島の客から参つた朝鮮人蔘。尾張  
大根見る様なを刻みもせず丸ぐち。人蔘の  
風呂吹を一期の見始め。人蔘でも鐵砲でも  
いッかな咽を通すにこそ。もう無いに極つ  
て私を呼び寄せ。今迄は隠した遠山とい  
うた昔から。四郎二郎様と夫婦の契約し。目  
出度う願ひ叶うたら。夫婦づれで熊野参り

を致さうと願ひをかけ。此の笠の紐も手づ  
から朽けました。これを被て四郎二郎様熊  
野へ参つて下され。死しても心は連れ立た  
う書置もしたいが。口でさへ盡くされぬ筆  
には中々廻らぬと。目をほつちりとあいて  
南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛と七八遍は聞  
きました。地なう肝心の時には念佛といふ  
物もなんのぐくに立ちませぬ。南無阿彌さ  
へす〜陀佛迄やらすにころりと取つてい  
きましたとわつと叫べば人々も。扱は定よ  
と手を打つて。フシ皆々袖をぞ絞らるゝ。地  
名古屋も呆れるられしが。疑ひもなく夫に  
引かるゝ魂魄假に形を見せけるぞや。さも  
あれ様子を尋ぬるため腰元衆。〜と呼び  
ければあいと答へて奥より出づる。詞なん  
とおみやは機嫌はよいかと云ひければ。ア、  
御機嫌ように〜と笑うてござんする。さ  
りながら心ざしありとて。酒も魚も口へ寄  
せず檀の香の煙絶やすな。煙絶ゆれば爰に  
ゐることならぬとて。地お寢間の内は抹香

でふすほりますといひければ。して。四郎  
二郎はどうしてぞ。ア、さればおみや様  
の頼みで。お寝間の襖に熊野の山の繪を  
遊ばいてござんする。地扱はみやが幽靈疑  
ふ所もないとあれば。腰元驚さア、怖や。

なう知らいで傍に居ましたと。膝のそばに  
這寄りて、フシ身を屈むこそ道理なれ。雅  
樂之介心を決せんと思ひ。さもあれ狸野干  
の業も有り。誠の死したる。幻は。形あれ  
ども影映らずと承る。某参り直に逢うて  
笠を渡し。灯火をたて實否を試し申すべし。  
かたぐは小庭より障子の影を御覽あれ。  
たとへ怪しいこと有りとも必ずわつといふ  
まいぞ。何が怖いこと有ると誰も口では夕  
暮や。小氣味の悪き籠が本軒に蚊蚊の餅つ  
きも。其前垂の名残かと心細くも佇めり。  
雅樂之介何心なき調子にて。是は暗いお  
座敷。みや様はそれにか。火を點したらよ  
うござらうといふ聲す。ア、さればいな。  
心の迷った身の上闇に闇を重ねるつらさ。

晴らしてほしやと夕顔の黄昏…らす行燈  
の。障子に映るを能く見れば元信は元の人  
體にて女の影は五輪とみやが物腰ばかり  
人間の地水火風の風脆き。木の葉に結ぶ陽  
炎の露の姿ぞ哀なる。地四郎二郎は勞々と  
疲れ侘びたる如くなり。雅樂之介猶訝しく。  
此の昔笠は里の便に参りしが。何に入る  
ことぞと云へばなう嬉しや嬉しや。ほんに  
是が欲しかつた私が熊野を信ずる事。敦賀  
では遠山三國での名は勝山。伏見へ賣られ  
て淺香山。山と云ふ字を三度つき。それ故  
に木辻では三つ山と付けられし。思へば熊  
野三つのお山の名を潰し。牛玉の咎めも恐  
ろしく。お主と夫婦にして下さらば。連立  
ちお禮に詣でませうと笠の紐迄行けおきし。  
追付け別るゝ身なれども一日でもかう添ふ  
からは。願は叶うた同然神佛に嘘はないと。  
此の襖戸にお山の繪圖を頼みまし。参つた  
心で拜まんと。思ふ所へこの笠は。どうし  
た便に來たことぞ。餘のことは何もいはず

か。地又の便に傳三殿へたとへいかなるこ  
とありとも。四郎二郎様へ歎きのかゝる事  
などは。知らせまして下さんすなと。よう  
いひ届けてくださんせと。苔の下まで我が  
夫フシいたはる心ぞ不便なる。地サア女夫連  
で参りませうこな様は勝手へいて。後夜の  
鐘の鳴る迄念佛きらして下さんすな。似合  
うたか知らぬと笠打被たる五輪の影。五つ  
の假の夢現餘所のことではなくくも。元  
の座敷へ人々は宗旨々々の手向草。題目眞  
言念佛の回向に。更ぐるも 三重  
三熊野かげろふ姿  
あきら惜しやあたら夜や。夫婦の中に。咲  
く花も。一夜の夢の眺めとは。知らぬ男の。  
いたはしやとフシ泣くより外の。事はな。  
昔の朝の。身仕舞に。髪に匂いたり裾にと  
め。そよとふくさの色風も。フシ今焼香に  
立つ煙。スエテ反魂香と燻ゆるかや。香爐の  
灰の。灰寄せも。順をいふならこなさんを。  
我こそあらめ逆様の。フシ水の流れの。身



のならひ。ところぐの死水を。誰にとら  
れんあさましと。フシオクリよそにへいひな

す。言の葉をフシ世に亡き人とは。そもし  
らす。アアいまくし。老木の末の。思ひ

置きはよしなやな。此方も其方も若松の。  
歌  
千代の盃ざゝんざ。フシ濱松の音。七本松

の七本を。女は率塔婆に數ふれど。男は今  
日の七五三。嫁入ごとせし戯れも今は誠と

嬉しけに。ハッ。手を引き。合うて笑ひ顔。  
フシ我は朝顔。しほみゆく花の上なる。露

とはしらぬ果敢なさよ。月は虧けても三  
つの山。オクリ娑婆の。便は片便宜文も届か

ず言傳もフシはで。心の。熊野路や。照手  
の姫のやつれぐさ。常陸小萩も夫ゆる身を

旅籠屋の。水棚の。はしに目鼻の餓鬼阿彌  
を。スエテ。夫とは更に白練の。縁は穢き土車。

心は物に狂はねど。オクリ。姿を。物に狂はせ  
て。説聖曳げや。く此の車ゑいさら。さ

ら。地。笹の葉に死出の旅路の。後世の  
友。一曳き曳げは千僧供養。二曳き曳げは

萬能の。フシ薬の湯本と聞くからに。四百  
四病は。消えもせん骨になつてもなほらぬ

は。私がそ様を戀やまひ。變る心を案じて  
は神の御名さへぞつとする。飛鳥の社濱の

宮。王子々々は。九十九所。百に成つても  
思ひなき世は和歌の浦。フシ。梢にかゝる。藤

代や。地。岩代峠汐見坂。書きうつす繪は残  
るとも我は残らぬ身と聞けばいとしやさこ

そ我が夫の。涙にくれて筆捨松の。平は袖  
に。フシみつ汐の。新宮の宮居かうくと。

出島によする磯の浪。岸打つ波は普陀落や  
那智は千手。觀世音。古へ花山の。法皇の。

后の別れを。戀ひ慕ひ。十善の御身を捨て  
高野西國熊野へ三度。後生前生のフシ宿願

かけて。發心門に入る人は神や受くらん御  
本社の。證。誠殿の階を。おりて下りて。

待ち受け悦びフシ給ふとかや。地。我はいか  
なる罪業の。其の因縁の十二社をめぐる輪

廻を離れねば。疑ひ深き音無川流れの。罪  
をかけて見る業の秤のおもりには。スエテ。そ

れさへ輕き磐石の。岩田。川にご若きにけ  
る。

地垂跡和光の方便にや名所く宮たち迄。  
顯はれ動き見えければ元信信心肝に染み。

我が畫く筆とも思はれず目をふさぎ。南無  
日本第一大靈驗。三所權現と伏し拜み。頭

をあけて目を開けば南無三寶。先に立つた  
る我が妻は眞逆様に天を踏み。兩手を運ん

で歩み行く。はつと驚きこれなうあさまし  
の姿やな。誠や人の物語死したる人の熊野

詣は。或は逆様後向生きたる人には變ると  
聞く。立居に付けて背より心にかゝる事あ

りしが。扱は和女は死んだかと。こほし初  
めたる涙よりスエテ盡きぬ歎きとなりけり。

口恥かしや心には陸地を歩むと思へども。  
逆様に見えけるかや四十九日が其の中は。

娑婆の縁に結ほほれ姿を見せて契りしもの  
を。妹背の中に怖氣立ち愛想も盡きば如何

せん。かはる姿のつゝましや逢ひ見る事も  
是限りと。泣聲ばかり身を絞る。地。涙の霧

や戀慕の霞。冥々。朦々朧々として。見え  
つ隠れつ燈火の。フシ油煙に。紛れ失せにけ  
り。地元信五體をかつぱと投げ。よし雨露  
に朽果てし骸骨なりとも抱き留め。肌身に  
添へん夫婦の友。何に怖氣の有るべきぞ。

地現世の逢瀬かなはずば。刃に死して此の  
世を去り。極樂諸天は愚かのことたとへ地  
獄の底迄も。誘へ伴へ連立てと。座敷のく  
まふく屏風おし退け。障子を開きやれ遠山  
は何方にぞ。みやはいづくに我が妻戸。明  
くる遺戸に遺手の形。スエテ現はれ見えしぞ。

哀れなる。中音いつならはしの世渡りや阿  
波の鳴門は越ゆるとも。此の浮舟のうき流  
れ何と遺手の身ぞつらき。まぶの忍び路關  
となり文の通ひの逆茂木に。人の思ひはフシ  
戒めながら。地我が身は包む戀衣赤前垂の  
火焰にこがれ。三途八難の惡趣に墮す苦み  
の涙目を眩まし。生死をわかぬ迷ひの雲所  
々に名を變へて。數々色を飾りし報。身體  
一つが五つに分れ五輪五行の苦をうくる。

如何なる世にか免れんと。叫びわななく袂  
の影艶色あてなる二人の遊女。フシ左右に。

別れ見えたるぞや。地是こそ其のはじめ  
白粉紅花によそほひし。後世の道には遠山  
があだの情の釣針に。人を教賀のうき姿松  
といはれし松が枝は。四大のものと木に。

フシ歸るなり。地次は三國へ買ひ流されて姉  
女郎や傍輩に。賣り負けまいぞ勝山と名を  
變へ風をかへけるも。戀に我を張る我慢の  
山。籠の塵のちりひぢの。土にかへすを御  
覽ぜとラシ夕月。出づる如くにて。地うしろ

に高くあらはれしは流れ漂ふ川竹の。伏見  
に來ての淺香山。地さすが所も極樂を。願  
へと告ぐる撞木町。安養世界の夜見世には  
點すべき灯火なく。吹消す風も吹かずして  
一心の火をもとの火に。返す間の影ぞかし  
前に。立つたる花薄。ほのく見えしまぼ  
ろしは。木辻の町の地三つ山と。フシ呼ばれ  
し。フシ時の面影が。今は名のみ。奈良  
坂や此の手の手の枕の酒囊。数と隔つれ

ど解くれば同じかすり井の。水をかりなる  
戯れも遂に迷ひの井堰にからみ。木は執心  
の斧に碎かれ土は逢ふ夜の壁と隔り。火は  
又三世の縁を焼く。四大の四苦を此の身一  
つに重ね。重ねて空より出でて空に入る。

報も罪も色も情も迷ふも悟るも待夜の鐘も。  
別れの鳥の聲々迄も。フシ地水火風の五つの  
玉の緒。只一筋に結びあひたる。フシ姿なる  
ぞや。地なうく惜みてもなほ惜まるよ。  
名残も縁もつひに行く。道ならばいざ伴は  
ん。とは思へども夫の命長かれと。祈る

心もさまふくに。皆妄執の仇夢と。さめざ  
め腕き涙の露の玉の臺の床の内。連理の蓮  
片敷て。長き契りを待つぞや待たん。標は  
これ。此の。一見率塔婆永離三惡道。南無  
や三熊野本地の三尊。迎へ給へや導き給へ  
と唱ふる聲は伏屋に残つて。フシ形は。見え  
ず消えにけり。地元信抱き留めんとすか  
りつけば影もなく。うんと仰向に目くるめ  
き忽ち息切れ絶え入りしを。名古屋揚屋門

弟等驚き騒ぎ。藥さまぐ、呼び助けやうやう。一間に三重、休めけり、フシ夜もほのく、と。地明け行く頃、管領の雑色衆不破の道犬長谷部の雲谷誘引し。伴左衛門が酒漬の死骸を昇せどや、亂れ入り。此の所に名古屋山三春平や在る。管領よりの御下知有り對面せんと呼ばはつたり。地名古屋遷々せず出で向へば、雑色鐵棒引き鳴らし。門不破の伴左衛門をお手前が手にかけしこと紛なき上。父道犬願によつて、吟味を遂げらるゝ處、盜賊の罪遁れがたく。曲事に行はるる條、召捕り來れとの御証。尋常に繩をかゝられよとぞ仰せける。名古屋少しも騒がず懐中より。忘八の手形數通の文を取出し。斯様の愚蒙の返答は申すも似合はぬこと乍ら。片口の御裁斷如何にしても輕々し。これ此の手形を御覽せ。葛城事は三月二日に親方が暇を取り、拙者が本妻借宅見たての間、揚屋に預け置きし所に。伴左衛門數通の斃書。斯の通り不義者の女敵な

り。此の方より願ひを申し。親道犬をも罪科に沈めんと存せし折柄。却つて我等を召捕れとは定めてそれは各の間違へ。それなる道犬か雲谷が事でがなごさう。地逃げも走りもせぬ男。聞き直してお出でなされよと、大様にこそ答へけれ。地道犬つと出でたない、こりや山三。悴伴左衛門葛城を請出す手付として。金子五百兩懐中せり。女敵討は聞えたがなぜ金子は盗んだ。總じて盗みと云ふ物も盗む時はうまい事。あらはれた時は辛い、苦い物ぢやけな。サアなんと遁るゝ所は有るまいと。地證據なき言分ながら名古屋も相手は死人なり。何をしるしの言譯と、フシにがくしくぞ見えにける。四郎二郎かくと聞くより飛んで出で。いや、とかうの評議は御無用盜人ならば盜人切取ならば切取。地科人は狩野の元信。繩は百筋千筋でもおかけなされと。大小抜いて投げ出さんとする所を。名

がら。それ迄に及ばぬ事ひらに、と押しめ。これ道犬。某盜人でない申し譯が立つならば。己れ又侍に。盜人といひかけした其の科はなんとする。時に雲谷進み出でイヤサ山三。盜人でない言譯立たば。命を助かる其の方が仕合せよ。道犬公は一子を殺され金子を取られ。何のあやまり有るべきと。いはせも果てずヤアうぬらが存する詮議にあらず。お屋形にては一つ間へさへ入れざりしを忘れたか雲谷。此の穿鑿濟んでうぬも遁さぬ用心せよと。睨み付くれば道犬。山三山三脇道へすべらすまい。五百兩の金子を身に付けた伴左衛門。斬りは斬つたが金はしらぬと言ふとても言はせうか。盜人でないならば言譯せよと詰めくる。チ、サ言譯はして見せん其のあととは合點か。地イヤまづ言譯から聞かんすと。せりあへば雑色これ、名古屋。問答迄もなし其の爲の我々。人にこそよれ兩方共に弓馬の身がら。盜賊といひかけ分明なら

ぬ訴訟。且は上を掠むる越度。言譯たゞば  
道犬は存分に計ふべし。又盜賊に極らば下  
知の如くお手前に。繩をかけ申すと理非明  
らかに述べらるゝ。名古屋勇んで罷出で名  
古屋山三春平は外の事は不調法。傾城の買  
様と人斬る様は大名。恐らく宗匠ごさん  
なれそれ。伴左衛門が死骸を是へ出さ  
れよ。心得たりと役人ども封切ほどき酒  
漬の。死骸は更に色かはらず。唯其の時  
の如くなり。名古屋袴のそば取つて近々  
と寄り。彼を討ちしは先月廿日。曉月の  
時鳥名乗りかけしは欺さぬ證據。向ふ疵に  
斬伏せとゞめを刺さんとのつかゝり。胸押  
開けば懷中に金子あり。此の儘置いては誠  
の盗人來つて搜し取らんは必定。時には山  
三が盗みしと後日の難を察せし故。鳩尾さ  
きを扶つて。金子は彼奴が身體の内肺の臟  
に押込んだり。五臟の中にも肺は金同氣求  
めて朽もどろけもよも爲まじ。地いで見せ  
んと手をのばし。ぐつと入れ朱に染みたる

緞子の財布。引きすり出してこれ見たか。  
是でも山三が盗人か。弓矢取る身の仕  
方を見よと道犬にはつたと投付け。死骸を  
踏まへつゝ立てば雜色を始めとし。元信其  
の外門弟等出來た。あつぱれ。御分  
別。後學なりと勇みをなす。道犬  
は言句も出ず雲谷はひるまぬ顔。相手の言  
譯たつたからは此方は切られ損。お歸りな  
されと立つ所を二人の雜色家飛びかゝり鐵  
棒ふり上げ打つ程に面も眉間も打裂かれ。  
胴骨碎くるばかりなりやがて繩をかけさせ。  
道犬親子は世間流布の重罪上を犯す科とい  
ひ。只今の始末諸人の見せしめ。親子諸共  
獄門に曝さるべし。先づそれ。死骸の  
首を討て。承つて下郎ども搔首にして髻を  
からけ。道犬が首にかけさせ現雲谷は當  
座の慮外。罪の軽重いかどあらんと有りけ  
れば。元信春平詞を揃。元は彼奴めが惡逆。  
騷動の始なり古主の屋形に訴へ。長袖なれ  
は流罪に行ひ申したし。尤々二人共に牢屋

へやれと引立つれども脛立たず。エ、卑怯  
者歩まずばまかせて桶にうち入れて。生  
ながらの酒びたし地獄の鬼の中食菜と。地  
ッ。戯れ笑ひ歸らるゝ悦ぶ中にも元信は。憂  
に沈む邪智の瀧亂るゝ色を勇めんと。唄へや  
唄へ雅樂之介。其の外の門弟中。憂ひは憂  
ひ祝儀は祝儀未來の嫁入は一七日。現世の  
嫁は七日町永く知行に墨筆や。家をさいし  
く繪具筆限筆。菓筆泥引筆その筆先に金銀  
も。わきて和泉の壺の印。ならびなつ毛の  
狩野の筆末世の。寶となりにけり。

下之卷

凡そ繪の道には六つの法有り。長康張  
僧陸探の三人を。異朝の三祖と學び來てフシ  
和國に筆の色をます。狩野の四郎二郎元  
信天然彩墨の妙手を得て。後柏原後奈良の  
院正親町の帝。三代四代の聖朝に仕へ祝鬘  
の後越前の法眼玉川齋永仙と號し。末世の  
今に至る迄。古法眼と賞歎するは此の元信

の筆とかや。既に大永七年新帝。大嘗會悠

紀主基の御屏風を書き。從四位の下越前

守に補任せられ。數多の門弟上下の供人

肩をいからす山科や。土佐の將監光信のオ

クリ山莊に、案内せられける。フシ將監夫婦。

地出向ひ今官祿に秀で給ふを見るに付け。

娘が事のみ忘れ難なう候とスエテ詞に先立つ

涙なり。詞仰の如く某ととも。彼の人を先

立て世に交る所存なけれども。將監殿を世

に立てんと。惜しからぬ世も捨てかね申せ

し所に。次第々々に登庸し大嘗會の御屏風

を仕り。叙爵に至る朝恩の上。地貴公の勅

勅訴訟叶ひ向後一家の結をなし。相並んで

繪所の門を開くべしとの宣旨を蒙り参り

たり。親御達を世に立てなば草葉の蔭の娘

御の。一つの迷ひも晴るべきかと型の如く

に禁中方。願ひ取りなし候と語り給へば將

監夫婦。有難や忝や歎きの中の悦びとは。

我等が身にて候。貴殿の御庇惠にて勅勸を

免さるゝも。一つは娘が光ぞと。フシなほ

／＼落涙せきあへず。地かゝる所へ名古屋

山三春平。椿着黄金時服さま／＼音物持た

せて。將監に對面あり雲谷不破が不屈故。

元信我等兩人永々沈淪致せし所。善惡の

是非落居し。三人の惡黨死罪流罪の嚴科に

處せられ。某も先知に復し候。其の節は姫

君の御事につき。御自分さま／＼御懇志の

趣。主人御屋形満足致され。先づ當分お禮

申さるゝ印目錄の通り。微少ながらと述べ

ければ。地御使がらと申し御丁寧なる御事

と。互の禮儀淺からず。フシ暫く時こそ移り

けれ。地稍あつて名古屋。ヤア承れば娘御

遠山。忘八の手前約束の年明けて。今日は

へ歸り給ふよし。地さぞ／＼お悦び推量致

したと。言へども人々のみこまれずとかう

の返答なき所に。供の者ども聲々に。地遠

山様はやあれまで見えまする。迎ひにお出

でなされませありや／＼振つてござるわと。

地言うても更に心得ず死して程經る遠山が。

歸らん様は涙ながら立出で見やれば屋形の

姫君銀杏の前。地搥入れずの二ツ櫛。鴨の

はなりの蓮葉袖吃の又平日傘。さしづめ

香車は。フシ女房なり。いつならはしの。道

中も。心つけければ振りやすいオクリふれ／＼

雪の遠山が御影もよもやは爰が。おれが

内かとなつと入り。なう父様母様今歸つた

わいな。久しうで逢ひやしたと。地とんと

坐りし居住居は。フシ禿だち見る如くなり。

地各は不審晴れず。名古屋は元より合點な

れば。地チ、いづれもの御不審は尤々。な

がう申せば段々あれども。必竟姫君を將監

殿の娘にして。死したる人が二度蘇生られ

たと思召し。元信にめあはせあれ姫君も一

度は。大事の命を助けられし各なれば斯う

なうてから親同然。地なまなか儀式だてし

ては養子というて面白なさ。又平夫婦と談

合して血をわけた遠山に。致したが我等が

趣向取組は御屋形の。御意でござると小短

く。譯も聞える道もたつ。金遣うたるしる

なり。地將監夫婦も悦び涙。ちひさい時の

お光が。成人顔見て嬉しいと抱き付いてぞ

泣き給ふ。名古屋重ねて懐中より一通を取り出し。謂はは田上郡七百町の御朱印永代

知行なされと頂戴させ。搦田上郡は給所々々

の入組にて地割中々むつかしし。某が父

主計之介天文の曆算に達し。鼠算盤と云ふ

ものを巧み。積物割物人の聲にしたがつて。

算盤の表明白にあらはる。是を以て勘

へば間づもり知行高。利那に相濟み申すべ

しとありければ元信聞き給ひ。それに付き

延喜の帝。陸平永寶駒引錢を鑄させて民を

賑はし給ふ。其の駒は晋の轉幹が馬を寫さ

れし。我亦其の駒の圖を傳へ覚えて候へ

ば。駒引錢を鑄て領内を賑はし申すべし。

是は珍重然らば善はいそがしや。嫁入婿入

國入して本祝言の儀式は重ねて。まづく

今宵は祝うてざつと目出度うそろへべくそろ

ばんつぶに萬代。積るぞ三重へ豊なるフシ

年は子の年。地大黒女夫力次第に子孫もわ

きいづる。地からは五穀手からは金が湧出

でく子々孫々迄。長久榮華の家繁昌は

君が。恵みの威徳なり。

右之本令吟覽頌句音節盡譜  
等不殘毫厘令加筆候可有開  
版者也

竹 本 筑 後 掾

重而予以著述之本令校合候  
畢全可爲正本者歟

近 松 門 左 衛 門

大阪高麗橋登丁目

正本屋 山 本 九 兵 衛 版  
山 本 九 右 衛 門 版